

れる瞑想の危うさに対しては、意識変容を自覚しつつ、他者に開かれ、コントロールの余地を残すことが大切だ。

最後に著者は、他者との関係の中で瞑想することの難しさと大切さを吟味し、美・効用性・無矛盾性・相互性という四つの視点を活用して瞑想を健全に保つ工夫を提案する。瞑想を独善的な世界に閉じ込めないための細かい配慮だ。

自動化した意識状態のまま右往左往する人生を外側から客観視させてくれる変性意識状態の働きが瞑想の目覚めや悟りや気づきをもたらしてくれると述べる著者は、悟りや解脱という抽象的な議論をすることなく、見事にそれを解説して見せてくれた。伝統を現代につなげるための表現方法とチームワーク作りに関して、評者は本書から実に多くを学んだ。著者に「ありがとう」を言って書評を終えたい。

森 雅秀著

『インド密教の儀礼世界』

A5判 世界思想社 二〇一一年一月三〇日刊
x + 三三九 + 222頁 六八〇〇円 + 税

山口しのぶ

本書は、インドにおいて成立、発展した密教(仏教タントリズム)の儀礼について、サンスクリット・テキストやチベット訳、漢訳の儀軌に述べられた内容を中心に、その構造と意味について考察した諸論文からなる論文集である。著者の森雅秀氏はかねてより密教儀礼、密教図像の文献学的な研究を行っており、本書はいままでの諸論文をまとめたものである。そこにおいて考察対象となった文献は複数あるが、特に中心となっているのは一二世紀頃に活躍したインド密教の学僧アバヤカラグプタの三部作『ヴァジュラーヴァリー』『ニシュパンナヨーガーヴァリー』『ジュヨーティルマンジャリー』である。

以下に本書の目次を示す。

序章 密教における儀礼研究

第一部 密教儀礼とテキスト

第1章 インドの宗教儀礼とテキスト

第2章 インド後期密教の儀礼集成書

第3章 『ニシュパンナヨーガーヴァリー』の構成

第二部 奉獻タイプの儀礼

第4章 インド密教における水の儀礼

第5章 ホーマ儀礼の構成原理

第6章 ホーマの修法と火炉に関する考察

第7章 施食の儀礼バリ

第三部 儀礼による聖化

第8章 アビシエーカ儀礼の起源と変遷

第9章 アビシエーカとプラティシユター

第10章 成就法と儀礼

第四部 儀礼と空間

第11章 ヴァーストゥナーガに関する考察

第12章 日本に伝わるヴァーストゥナーガ

第13章 インド密教における聖地と巡礼

第14章 密教儀礼と聖なる空間

まず序章において、著者は元来儀礼に対して積極的な態度を取らなかった仏教が、密教の時代に儀礼との結びつきを強めたことを述べる。次にインドの宗教儀礼の分類、これまでのインド学仏教学における儀礼研究の歴史と儀礼研究を取り巻く問題点等が述べられている。

つづく第一部は先に述べたアバヤーカラグプタの三部作のうち、『ヴァジュラーヴァリー』と『ニシュパンナヨーガーヴァリー』の内容の考察が中心となる。第1章は次の第2章、第3章のための導入としての位置を占める。第1章ではインド宗教

の儀礼テキストについてヴェーダ文献および仏教、特に密教儀礼のテキストについて述べ、インド宗教が儀礼を中心にすえ、システムを持つ儀礼が「言葉」の力によって保障されていることを述べている。第2章は密教儀礼テキストとしての性格を、『ヴァジュラーヴァリー』と同じくアバヤーカラグプタ著の『アビシエーカ論』との比較により述べた論文である。また第3章は主に観想されるマンダラについて述べた『ニシュパンナヨーガーヴァリー』のマンダラ解説順序に着目し、実際のマンダラ作成よりも観想すべきマンダラが多かったため『ヴァジュラーヴァリー』を補う補助手段として『ニシュパンナヨーガーヴァリー』が執筆されたという結論を述べている。第2章と第3章での考察には、二つのテキストがどのように関わっているかが示されており興味深い。第1章のテキストに関する解説はやや一般的過ぎ、第2章、第3章での綿密な考察とは密度が違うと感じられた。

第二部は供養(プージャ)や護摩(ホーマ)、またバリ儀礼など何らかの供物を奉獻する儀礼についての四つの論考からなる。そのうち第4章は前述の、『ヴァジュラーヴァリー』『ジュヨーティルマンジャリー』、またネパールで編纂されたと考えられる『阿闍梨所作集成』、およびチベット仏教ゲルク派の創始者ツォンカパ著『真言道次第』の四文献中の諸儀礼における水を捧げる行為について論じている。

そこにおいて著者はフリース、エリアーデらの「水」のイメージ、ヴェーダ祭式の水、初期仏教、大乘仏教、密教における水の役割、および仏教の造形作品における水のシンボリズムに

ついて説明し、その後先の四文献における水の儀礼について考察が進められる。ここでの「水」とは四種類、すなわち「アルガ(またはアルギヤ)」「閼伽水」「パードヤ」「洗足水」(「アーチャマナ」(漱口水)、「プロークシャナ」(灑浄水)を指す。

著者の考察では儀礼で用いられる水は「礼拝の対象に捧げられる水」(Aタイプ)と「儀礼行為者自身とその人物に属するものに向けられる水」(Bタイプ)に分類される。これらのテキストで、四種の水はAタイプに属すが、元来プロークシャナはBタイプに属し、またアーチャマナも単独で用いられる場合はBタイプに属する場合があり、両者の結びつきがみとめられ、それぞれの水の儀礼の背景は一樣でないとされる。インド密教の伝統を受け継ぐ現代ネパールのネワール仏教のバリ儀礼においても、僧侶は一つのほら貝の水をバリ供物に注ぎながら「口漱水と灑浄水を受け取られよ」と唱える。ここでもアーチャマナとプロークシャナは結び付きが認められ、前述の著者の見解は妥当であると思われる。著者はまたアルガとパードヤを対象に依存した語、アーチャマナとプロークシャナは行為そのものを示す語として区別しているが、評者はアーチャマナとプロークシャナは浄化に関わる水で、アルガとパードヤはそうではない水(パードヤは足を洗う水だが、この場合外から来た客が足の汚れを落とす意味で用いられ、いわゆる「浄化」の意味は無い)という区別も可能ではないかと考える。

第5章、第6章はいずれも『ジュヨーティルマンジャリー』の内容からホーマ(護摩)儀礼について論じたものであり、第5章はホーマの四種法である息災、増益、敬愛、調伏のうち、

前三種がひとまとまりとされ、他のひとつの調伏法が前三者に相反するものとして位置づけられていることに注目し、右左、浄不浄、吉凶などの宗教的な二分法が仏教儀礼の質的転換の手段とされていることを指摘している。また第6章は前述のホーマの四種法に加えて「すべての儀礼行為」という修法の五種法を対象とし、修法と、円形、方形等の火炉の形状との関わりについて考察する。そこにおいて著者は初期には「すべての儀礼行為」と敬愛法とが同じ範疇に属しており、それを蓮華という形状が示唆していたことを指摘する。さらに蓮華の「豊穡」「多産」「全体」「世界」というイメージやマンダラとの結び付きから、すべての儀礼行為という修法に関して火炉の形態から実践内容を規定するようになったという結論を述べている。

第7章は食物を中心とした「バリ」と呼ばれる供物を献供する儀礼の性格や機能について考察した論文である。そこにおいて著者はまず『ヴァジュラーヴァリー』の第四八「バリ儀軌」におけるバリ儀礼の次第を詳細に説明し、バリ儀礼は他の儀礼の中に組み込まれるユニットと位置づける。さらに現代のチベット、ネパールで行われているバリ儀礼とグリフヤストラ文献に見られる「ヴァイシュヴァデーヴァ」との比較を通じて、バリ儀礼の目的を考察している。ここで著者はバリ儀礼の目的を「妨害者を慰撫するため」としたアバヤカラグプタの定義に対して「なぜバリの対象を広げたかという理由がこの定義だけでは説明できない」と述べているが、それではバリの対象が広げられていった理由を著者自身がどのように考えるかが、本章においてはいま一つ明確にされていないと感じられた。ヴァ

イシュヴァデーヴァのバリ供においてインドラやアグニなどの護世神やその眷属、死霊などの諸霊に捧げられたのは、それらの存在が慰撫を必要とするような危険な性格を孕んでいることを前提にしていた。そのようなバリの対象が特に後期密教において主要尊にまで広がり、またヒンドゥー・タントリズムにおいても同様の広がりを見せた事は、元来バリ儀礼が持っていた「慰撫」という目的と、仏教およびヒンドゥー・タントリズムにおいて儀礼の対象となる諸尊、諸神の性格がどのように関わるか、ということも含めて検討する必要があるのではないかと思われる。

第三部の第8章から第10章は「聖化の儀礼」としての入門儀礼アビシェーカ(灌頂)および仏像や仏塔などの完成式としてのプラティシュタを取り扱っている。第8章はアビシェーカ儀礼の起源から初期仏教、大乘仏教、密教における展開を述べたもので、続く9章、10章のイントロダクションとなっている。そこにおいて著者は国王の即位式とされたアビシェーカが、王が後継者を定め、それを周知させるために行う儀式をも指すことに注目し、その後継者への儀礼という性格が、仏教において菩薩が修行を終えて仏となることを約束される儀礼に投影されたという見解を示しており興味深い。著者によれば、中期密教の時代には、弟子を対象としたアビシェーカはマンダラを使用したさらに複雑な儀礼となり、特に『真実撰経』では誕生儀礼、再生儀礼としての性格が打ち出される。後期密教の時代になると四種の灌頂へとシステムが整備され、性的な要素も含まれるようになり、当初のアビシェーカとは非常に変化した

ものとなるが、時代が変遷してもアビシェーカは祝祭的な性格を基調としていることを指摘している。本章ではアビシェーカの時代的変遷とその底流をなす基本的な性格が明確に示され、アビシェーカの基本的理解に役立つ内容となっている。

第9章はアビシェーカとプラティシュタの構造比較を中心に、両儀礼が形成されてきた背景について考察する論文である。ここでも『ヴァジュラーヴァリー』に述べられるプラティシュタの内容が考察対象となる。そこにおいてプラティシュタは(1)「尊格のディヴァーサナ」と(2)「狭義のプラティシュタ」に大別され、(1)は沐浴壇の設置、ニラージヤナ(尊像の前で灯明を回すこと)、沐浴、マンダラの北東への移動、三昧耶薩埵と智薩埵の合一が含まれ、(2)には九種の灌頂、プージャヤー、火供、開眼作法、乳粥の摂取、請願と帰依、おゆるし、バリ、施主による札拝と阿闍梨の歓待からなるという。著者によればこのプロセスのうち九種の灌頂(水、宝冠、金剛所、鈴、名、阿闍梨、秘密、般若智、第四)がそのままアビシェーカの中でも行われ、『ヴァジュラーヴァリー』の著者アバヤカラグプタも、プラティシュタの灌頂がアビシェーカと共通することを意識しているという。さらに著者はアバヤカラグプタ以前に活躍したヴァーギーシュヴァラキールティの作『プラティシュタ儀軌』においてはプラティシュタのプロセスが『ヴァジュラーヴァリー』のそれとほとんど一致するにも関わらず、後者に含まれる水灌頂を除く八種の灌頂のみが欠落すること等から『ヴァジュラーヴァリー』のプラティシュタは『プラティシュタ儀軌』の説く同じ儀礼に水灌

頂を除く八つの灌頂を加えた形であると述べる。さらに水灌頂のみを行うプラティシユターが『ヴァジュラーヴァリー』以前の密教のスタンダードなプラティシユターの形であり、それは初期、中期密教のアビシェーカアビシェーカの構造に酷似すると指摘し、プラティシユターとアビシェーカアビシェーカの初期的形態の類似性より両者に共通するモデルの存在を示唆している点は、長年インド密教儀礼の文献研究を行ってきた著者ならではの指摘であると言える。

さて著者は第9章ではヴェーダ文献に見られる国王即位儀礼と密教のアビシェーカアビシェーカの比較、またヒンドゥー教のグリフヤスートラ文献とプラーナ文献におけるプラティシユターと密教のそれとの構造を比較している。それらの結果を踏まえて、結論として著者はヒンドゥー側に沐浴を重要な要素とするプラティシユターがはじめにあり、これを弟子に應用してイニシエーションとしたのがアビシェーカアビシェーカで、そのまま仏像の完成式として受け継いだのが密教版のプラティシユターであると考えており、「密教徒にとつてはアビシェーカアビシェーカもプラティシユターも対象を聖化する聖別の儀礼であって、対象の違いを除けば両者に区別を与える必要はない」と述べている。しかしながらこれはいささか性急すぎる結論ではないだろうか。密教儀礼ではないが、現代のヒンドゥー教で男根をかたどったシヴァ・リンガに對して水を注ぐ一連の儀礼行為は、しばしば「アビシェーカ」と呼ばれている。古代から現代までのヒンドゥー教、仏教において長きにわたってスタンダードな儀礼として行われてきたアビシェーカアビシェーカとプラティシユターに関しては、より多くの形態に

ついて構造分析が行われるべきではないかと思われる。

第10章は第8、第9章に述べられてきたアビシェーカアビシェーカとプラティシユター儀礼への言及はあるが、全体としてはインド密教の成就法サダナ(観想法)の集成である『サダーナマラー』に述べられる「三昧耶薩埵」と「智薩埵」の二つのイメージの成就法における位置づけや機能の考察が中心となっている。著者の言うとおり、上記の二つのイメージは先行研究が多数あるが儀礼との関わりで取り上げられることがほとんどなかった。そのような意味でこれらのイメージをマンダラ制作儀礼、プラティシユター、アビシェーカアビシェーカ等重要な儀礼のコンテキストの中で考察した点は興味深かった。

第三部は建築儀礼、聖地巡礼、また寺院やマンダラなど聖なる空間についての諸論文からなる。第11章は「ヴァーストゥナーガ」と呼ばれる寺院建築予定地に描かれるナーガナーガ(蛇)の儀礼について『ヴァジュラーヴァリー』『阿闍梨所作集成』『クリヤーサンクラハ』等の建築儀礼およびマンダラ制作の記述内容の比較、実際に描かれたヴァーストゥナーガの図像、ヒンドゥー建築書のヴァーストゥナーガの記述等、さまざまな視点から儀礼におけるヴァーストゥナーガの役割について考察した論文である。そこにおいて著者は緻密な文献比較からヴァーストゥナーガは単なるナーガではなく、一年という時間経過を示し聖なる空間に結びつくという基本的性格を明らかにしている。

第12章は日本の福島県の大工に伝わる巻物「番匠秘書」に述べられる建築儀式に現れる「龍伏りゅうふせ」の起源について、ヴァーストゥナーガとの比較から考察した比較的短い論考である。日本

の龍伏とヴァーストゥナーガとの驚くべき類似性から、両者は偶然の一致とは考えにくく、同じ儀礼であったと著者は述べ、その根拠として奈良の大神神社や陰陽道の史料を挙げて説明している。本章は読み物としては面白いのだが、根拠としては薄く、龍伏とヴァーストゥナーガが本当に同じ儀礼であったと見ることができると疑問である。他の章では緻密に文献的な根拠を立ててきた著者が、ここでは突然雑駁な見解を述べているという感否めない。

第13章で著者は、インド密教の聖地について、後期密教經典で述べられる二十四ピータや八屍林などの実在しない聖地、また実在する八大聖地などに言及し、その機能について述べているが、観念としての聖地を構想することの意味や、実在しない聖地と実在する聖地との関係性についての言及が欲しいと感じた。

最後の第14章においては、密教儀礼の結界法、マンダラ観想法、および寺院建築という密教における「聖なる空間」はそのような視点で表象されるかについて述べられている。著者によれば、これらの空間には「右旋型」「放射型」「鳥瞰型」という共通のパターンがあり、ひとつの空間の事例に複数のパターンが登場することを指摘し、マンダラ観想にはマンダラ外郭や楼閣の観想時の鳥瞰型と、中尊と諸尊の観想に見られる放射型の両者が併存しているという。「聖なる空間」としてのみマンダラを見れば確かにそうかもしれないが、マンダラは聖なる空間であると同時に、行者の修行の過程としてとらえるべきものである。その過程においては常に行者が中心となりマンダラの器

と諸尊を観想していく。この点からみれば、鳥瞰型と放射型の併存ということが言えるのかどうか疑問に感じた。

以上、本書の概要といくつかのコメントを述べてきた。『ヴァジュラーヴァリー』と『ニシュパンナヨーガーヴァリー』両テキストの関係性や、プラティシユターとアビシェーカの共通性など、著者の文献学的アプローチの効果が発揮される場面は多いものの、第9章の結論のように性急すぎると感じられる結論が述べられている箇所も時折見受けられた。また本書全体を見て、著者が密教儀礼をどのようにとらえているのか、という独自の視点が今ひとつ明確でないように思われた。たとえば序章などにその視点を示して欲しかった。

しかしながら、長年のサンスクリット、チベット語文献を通じての個々の儀礼構造の分析は参考になるものが多く、今後さらに著者独自の視点を取り入れた儀礼論が展開されていくことを期待したい。